

## 2019年度 第3回基礎学習理論研究会レジュメ

『問題解決学習入門：第Ⅳ章・おわりに（藤井千春、学芸みらい社、2018年）』

大和郡山市立郡山西小学校 島俊彦

第Ⅳ章では、教師としての学びと成長について、授業研究の文脈に即して、著者の考察がなされている。また、おわりにでは、本著を貫く問題解決学習の原理について、主体的・対話的で深い学びの枠組みから総括している。近年、求められる教師の資質・能力として、学び続けることが挙げられている。日本の教師教育の場では、ドナルド・A・ショーンが提唱する「省察的実践家」の概念から言及されることが多く、実践を省察しながら専門的な職能開発を進めていくことが、教師としての成長と学びであると捉えられている。

本稿では、教師としての学びと成長について、3つの観点から考察を加える。1つ目は、授業観察の視点について、2つ目は、協議会における対話について、3つ目は振り返りについてである。

1つ目の、授業観察の視点についてである。研究授業の場においては、参観者による具体的な授業観察・記録が欠かせない。それは、協議を深め、実りのあるものにするためである。著者は授業観察の視点として、観察対象児を選定することを提案している。確かに、子どもの学び方や変容を詳細に捉える手法としては有効であろう。しかし、それだけでは不十分である。なぜなら、児童は他者やテキスト、環境などとの相互作用を通して、学びを深めるからである。個別具体的な児童の変容を捉えることに留まらず、児童同士の関係性や発言前後の文脈から捉え、児童の学びや変容が、（なぜ）どのように生じたのかについて考察することを提案したい。

2つ目の、協議会における対話についてである。協議会の在り方については、ワークショップ型やパネルディスカッション型を採用する等、質的向上を目指して、近年様々な試みがなされている。筆者の勤務校でもワークショップ型が採用されており、一見すると活発に対話がなされているように感じる。しかし、違和感もある。それは、各教師の授業観や児童観が共有されていないからである。お互いが違うベクトルを向いて話し合っているため、話が噛み合わず、対話が成立しない場面が多々見受けられる。より良い協議会を目指すのであれば、お互いが教育に対してどのような価値観を有しているかについて、話し合う必要があると考える。例えば、どのような授業を創っていきたいか、どのような子どもを育てていききたいかなど、教育活動の本質的な問いについて話し合うことが考えられる。

3つ目の、振り返りについてである。教師は多くの場合、実践しっぱなしであったり、どのように実践を振り返ればよいか分からずにいたりする。そこで著者は、①子どもの観察を記録すること②授業記録を起こすこと③実践記録を執筆することの3点を提唱する。また記録する際、「その教師の眼から見た、その教師によって捉えられた子どもの具体的な言動(事実)について、その教師自身の言葉によって語る」ことの重要性を指摘する。続けて著者は、実践者の語りを複数の教師に聞き、検討してもらうことの重要性を指摘する。しかし、これでは他力本願の授業改善しかできず、自分で授業改善のサイクルを回すことが出来なくなる。理論と実践の往還によって、より質の高い実践をするために、たとえ実践記録であっても、一定程度以上の客観性が担保されるべきである。そうでなければ、実践記録を読んだ他者の役に立つことはない。実践に対する省察を、自身で納得がいくまで行った上で、複数の教員に語りを開く方が、授業力向上に効果的であると考えられる。

以上のことから、教師としての専門性を高め省察的実践家になるためには、他者の授業を観察すること、授業について語り合うこと、授業を実践し振り返ることの3点が、極めて重要であると言える。授業で勝負できる教師になるために、今後も学び続け成長していきたい。